

●モノグラフ小学生ナウ



生活体験

vol.2-10

© 1983 (株)福武書店 教育研究所/加藤智穂・賀川雅子・河部悦子
東京学芸大学助教授 深谷和子・東京都品川区立教育センター 横山緑



目次

特集／体験の重み	2
調査レポート／生活体験	
要約と提言	8
1. 生活の体験	10
● 欠けている生活の体験	11
2. 自然の体験	13
● 少ない自然体験	13
● おとなっぽい体験の増加	15
3. 情緒的な体験	16
● ショック体験の不足	17
● とっくみあいのケンカもせず	18
● 生と死にも出会わず	19
4. 体験と自己像	21
● 自信との関連	21
● 成績との関連	24
● 自己像との関連	28
まとめに代えて	31
シリーズ／子ども考現学	
子どもの姿・昔と今(8) 児童規則	32
資料1・調査票見本	37
資料2・学年・性別集計表	41

特集●

体験の重み

東京学芸大学助教授 深谷和子



あるエピソード

「犬の足は4本、ではニワトリは？」
と尋ねたら、幼い子どもたちは何と答えるだ

ろう。
「ニワトリは2本」
むろん正解である。しかし間違える子ども

も、たくさんいるはずである。これは、現在わが国のクリニックで、いちばんよく使われている子どもの知能テストの問題の1部なのだが、問題なのは、その誤答のタイプ、答の間違い方なのである。

「ニワトリも4本」

これはまず自然な誤答だろう。

「ニワトリは、コケッコウ」

「ニワトリはうちにいないの」

これは完全に問題の意味をとり違えているわけだが、子どもらしい間違い方で、これもまたいい、という気がする。

ほんの10年か15年前までは、子どもたちの誤答は、だいたいこんな内容のものだった。ところが、最近になって、なんとも不思議な誤答が、ごくたまにはあるが新しく入り込んでくるようになったのである。

「ニワトリは3本」

というのがそれである。

実は筆者も知能テストをしていて初めてこの誤答に出会った時は、一瞬ギョッとして、次の設問が出てこなかったのを、覚えている。つまり、他に間違い方もあろうに、「3本」とは、どう見てもただ事ではない。自然によく触れていて、犬や猫や鳥や虫や……とにかくあらゆる生き物を身近に見聞き、接触を持っていれば、およそ3本足の生き物がいるはずがない、という観念がまず子どもたちの中に形成されているはずなのである。つまりこの「3本」という誤答は、そうした生き物に対する常識が形成されないような背景、すなわち子どもたちの生活の中に自然体験の欠落があることを示すものだろう。



2種類の体験

人間が、他の動物たちと著しく行動の仕方を異にするようになったのは、われわれが直接対象にかかわり、そこで得た体験(直接体験)をとおして成長すること以外に、他人の体験を自分の中にとり入れること(間接体験)ができることからだと言われる。もしわれわれが他の動物たちと同じように、自分の足で歩いて行ける範囲にしか自分の世界を持つことができず、しかも自分で直接体験したこと以外に体験を持てなかったら、その成長の仕方は、今とは比較にならないほど小さなものだっただろう。その意味で「間接体験」の果たす役割は、きわめて大きなものがある。

しかし、この2種類の体験のとり入れ方には、必要な順序がある。つまり人が生まれてから直ちに「直接体験」が開始されるわけだが、それがかなり十分に自分の身についた後で、初めて「間接体験」をとり入れることで、直接体験の補いにしていく、という順序である。

例えば子どもはまず、直接自分の足を冷たい水の中に入れて、水は冷たいものであることを学ぶ。その後、次つぎと雨上がりの後の水たまりに足を入れ、池に入り、川に入って、水の感触を学んでいく。そうした体験に支えられれば、水の冷たさはむろんのこと、海や川のイメージも、大きさや冷たさを含めて、より鮮明に形成することができるだろう。

しかし、もし手を洗う時に蛇口から出てくる水と、コップの中の飲み水しか知らない子どもがいたとすれば、彼は「水が冷たい」こと

を、ただ頭の中で、つまり観念として知っているにすぎない。人が川の水は冷たいと言うから、ただそれを想像するだけであって、実際に、流れや川底の石に足をとられそうになりながら、膝の上までもある深さの川を渡り切って、向こう岸へたどりついた時の気持ちは、ただぼんやりとわかるといった程度のものだろう。

これに対して、何度となく川で遊んだ子ども時代を過ごした者たちには、例えばテレビで兵士が川を横切って敵地へ上陸するドラマを見ていても、そのシーンはかなり迫力のあるもの、臨場感を持って迫ってくるものになるだろう。テレビの画像より伝えられるドラマは、1つの「間接体験」だが、その基礎になる「直接体験」を十分に持っている者にとっては、その間接体験を、かなり自分の「本物の



体験」に近いもののように、受けとめることができるのである。

このように、直接体験と間接体験の体験の順序は、子ども時代にまず十分な「直接体験」を重ねる、というやり方で始めなければならないだろう。そしてこの、大切だが時間も労力もかかって能率の悪い直接体験だけでは、もう人間の成長に必要な「体験」の量が確保できない、という時になって初めて、他人の体験を「借りてくる」ということが意味を持つようになるのである。

しかし最近の子どもたちの生活の中には、早くから、この「借り物の体験」が入っている。子どもたちは、その結果、自分の体を動かして、本物の体験を積むことをひどくおっくうがるようになってしまっている傾向が見られる。

これは先日ある中学の先生に聞いたことなのだが、その中学では修学旅行で、京都へ行って、バスでお寺めぐりをしたのだと言う。ところがバスは当然お寺の中までは入れない。門前でバスを止め、中に歩いて入って行かなければならないわけだが、生徒たちの中には、それを嫌がる者が続出したのだそうである。この場合、お寺が生徒たちの関心の対象でなかったことにもよるのだろうが、と言って、生徒たちの大部分が関心を寄せているスポーツや歌手のコンサートでも、一部の者は熱狂的に出かけて行くが、大部分は、やはり腰を上げない組なのではないだろうか。

つまり現代のように、子どもが生まれてすぐからテレビとの深いつき合いが始まり、間接的な、借り物体験が直接体験に先行して体験されてしまうと、子どもたちはそれに慣れ



てしまって、むしろ本物との(苦勞した)出会いをおっくうがるようになる。しかし「借り物体験」はあくまで本物ではなく、百歩ゆずっても、本物との出会いを重ねた後でのみ、本物に近い意味を持つのだということを、知っていなければならないだろう。

成長への影響

さて子どもたちの生活の中から、本物の体験が失われたことで、子どもたちの成長にどんな影響が出てきただろうか。今まで触れてきたことも含めて、まとめてみよう。

①感受性の低下

先に触れたように、直接体験は、子どもたちのあらゆる感覚に訴える、みずみずしい体験である。子ども時代に、多くの本物体験を持った子どもは、それだけ生き生きとした感動を味わった子どもでもある。こうした刺激への感受性は、おとなになってからでは、育てることができない。特に自然とのかかわり、人間とのかかわり、生活とのかかわりで、豊かな本物体験を、幼少期に与えることが必要であろう。

②問題解決能力の低下

われわれが子どもたちに、「勉強」という名で課している作業は、本来生活における「問題解決能力」を育てるものはずだった。現在の日常的な問題についてはむろんのこと、将来子どもたちが成人し、職業生活や家庭生活を営んでいくうえに、必要にして十分な問



題解決能力を育てるために、教育があったのであろう。

勉強はそうした意味から単なるデスクワーク、知識の記憶やドリルを使っただけのものに止まらず、もっと直接的な日常の場や、屋外での体験の学習を含むはずのものだった。しかし、大きな建物を作りそこへ子どもたちがおおぜい集まって来る、という形をとるとどうしても学校は、子どもを机の前に座らせておいて、知識を順序よく覚えさせ、問題を与え座ったまま頭の中でそれを解いていかせるといった作業に偏ってくるのは、やむをえないことだろう。

ただしこうした学校の持つ機能は、子どもたちが日常生活で、豊かな直接体験を重ねていた時代には、大きな役割を子どもの成長に果たすことができていたのだと思われる。しかし現代のように、子どもの生活が、家庭においても学校と同じように、間接体験への傾斜を増すようになると、学校での教育の内容も、見直されなければならないかもしれない。

けれどさしあたっての問題はやはり、子どもたちの学校外の生活を、もっと充実したものに、すなわち本物の体験を豊かに与える場にしていくということだろう。例えば、日常生活で、生まれてから一度も網で魚を焼いたことがないとか、お湯をわかしたことがない、木登りをしたことがない、川に入ったことがない、というような、昔の子どもたちの生活からは考えられないような、体験の幅の狭さは、現実の生活における適応性の低下、問題解決能力の低下をもたらす結果になっている。こうした日常生活上の問題解決能力を持たず



に、算数のドリルでより抽象的な問題解決の方法を学んでも、本末転倒であろう。最近の若者たちが、口先ばかりで、仕事の場では全く何もできない、と言われるのはこうしたところから生じてくるのかもしれない。

③働きたがらない人間を作る

直接体験とは、言うまでもなく、実際に自分の体を動かして、対象にかかわって得られるものである。そこには当然、つらい、しんどい、疲れる、時間がかかる、といったネガティブな結果が伴う。子ども時代に直接体験より間接体験が先行してしまうと、人間の弱さとして、「楽な方がよい」という傾向に走ってしまうことになるのは自然のなりゆきであろう。そうでなくても、年をとれば、体を動かすのはおっくうになる。子どものうちから、動くこと、体を使うこと、働くことを苦にす

る人間を作ってしまったら、その先いったいどうなるのだろう。

考えてみると今日の子どもたちが、直接体験を欠くようになったのは、教育期待の高まり、テレビの出現、子どもの生活環境の悪化、都市化に伴う「地域」の喪失など、種々の条件が重なり合って、複合的にもたらされたものであり、それだけに、ひどく解決の難しい課題をわれわれは負わされていることになる。こうした悪い条件の下で、どうやって健やかな子どもを育てていくことができるか。それには、よく言われることではあるが学校、家庭、地域が、互いに協力しあって、何らかの解決策を見出す努力が、さしせまって必要であると思われる。が、その中でも「直接体験の回復」を、1つの目標として、設定することが、こうした運動の方向に、1つの手掛りを与えるものとなるだろう。

調査レポート／生活体験

東京学芸大学助教授 深谷和子
東京都品川区立教育センター 横山 緑

要約

① 生活体験に欠ける

生まれてから魚を焼いたことがない子どもが男女約50%、靴みがきをしたことのない子どもが50%、果物の皮をむいたことのない子どもが男子28%、女子17%と、子どもたちの生活の体験は、昔と比べて大きく欠けている。(図1)



② 自然体験に欠ける



生まれてから屋根の上を歩いたことのない子どもは、男子で32%、女子50%、たき火をしたことのない子どもが男子34%、女子43%、カエルにさわったことのない子どもが、男子13%、女子52%。全体としてははむろんのこと特に女子の自然体験が大きく欠けている。(図2)

③ 友だちとケンカもせず

友だちと、とっくみあいのケンカをしたことのない子どもが男子31%、女子67%、人をたたいたことのない子どもが男子10%、女子20%。(図5)



④ 自信過剰な子どもたち



子どもたちはこうした日常的な生活体験の欠落から、無器用で、体を動かしたがらず、問題解決能力が低くなっていると推定されるが、にもかかわらず、「やればできるだろう」と安易に考えているふしがある。

(図7)・(図9)



生活体験と教科の成績



教科の中で、特に生活体験の量と
かかわりを持っているのは、体育と
理科、社会科のようである。(図10)・
(図11)・(図12)



体験の多さと自己評価

生活体験の多い子どもは自分を「が
んばる子ども」と評価する傾向があ
る。(図17)



提 言

子どもたちに、もっと豊かな生活体験を与えよう。テレビや読書による情報から間接的に人生を体験し、学校の勉強や家での家庭学習をとおして、机上で問題を把握し問題解決の練習をする、という「直接的でない」学習が、現代の子どもたちの体験内容を多く占め過ぎている。

しかし後日、子どもたちが社会人として生活していく日に、彼らの生きる力の背景とな

り血や肉となって彼らを支えるのは、人から見聞き教えられて身についた知識ではなく、実際に自分の体をとおして直接学習し、体に覚え込ませた「直接体験」ではなからうか。

直接的な体験を与えるのは、「家庭」や「地域」の生活であろう。そのことを親やおとなたちは、子どもの教育におけるさしこめた課題として受けとめるべきであろう。

サンプル数 (人)

学年/性	男子	女子	計
3 年	88	74	162
4 年	254	259	513
5 年	226	258	484
6 年	250	265	515
計	818	856	1,674

調査概要

対象・東京・山形・千葉・奈良近郊の小学3～6年生
時期・昭和57年3月～7月
方法・学校通しによる質問紙調査

1. 生活の体験



このレポートは、現代の子どもたちの「生活体験」の内容を総点検してみようとしている。

今日、日本中どこへ行ってみても、いわゆる都市化が着々と進行していることを感じる。そのことは、おとなの生活に便利な環境というだけで、子どもたちの健康な心身発達には必ずしも適さない生活環境が、ますます子どもたちの周囲にひろがりつつあることを意味するだろう。そして別の側面では、過保護、過教育と名づけられているような、子どもの生活上のコントロールも、今日一層強まっている。

こうした条件の下では、子どもたちの「生活体験」に大きなバランスの崩れが起こってくることは、当然考えられよう。本調査レポートは、子どもたちの生活体験を、まず大きく「生活の体験」「自然の体験」「情緒的な体験」に分け、それらの体験量を1つひとつチェックしたうえで、見い出された結果と人間形成との関連を考察してみようとするものである。対象は、大都市環境との意味から、東京の5つの小学校の3、4、5、6年生、及び地方都市(山形・千葉・奈良)の6つの小学校の4、5、6年生計1,674名とした。

欠けている生活の体験

まず「生活の体験」から見ていくことにしよう。生活の体験とは、次ページの図1に掲げたように、人間が生活していくためには、男女を問わず、最低このぐらいのことができなければ、いわゆる「生活者」としての条件を欠くのではないか、と思われるような内容の、22項目より構成されている。

図はいちばん体験量の少ない「1人でごはんをたいたこと（米とぎから全部）」（ほとんどしたことがない子ども、男子65%女子40%）に始まって、もっともふつうに体験されている「自分でツメを切る」まで、大小順に並べてある。これらの項目は、今の親の世代、またはその上の世代が子どもだった頃には、いずれも日常くり返し体験されていたはずのものである。

しかし図の項目と数字を見ていて驚かされるのは、何と言っても、全体的な量の少なさであろう。図で使用された尺度「ほとんどない」はむろんのこと、「2、3回ある」でも「体験」が身につくとはとうてい考えられない程度のわずかな量である点を考えると、これらを「体験」の不足した子どもたちとして加算することが妥当であろう。となると、「ごはんたき」をあまりしたことのない子どもは男子84%女子で66%、「魚を焼く」こと

をほとんど体験していない子どもが男子80%、女子74%、「靴みがき」80%と72%、「果物の皮をむく」58%と40%、「雨戸を閉める」36%と38%、「戸外の水まき」50%と39%などとなる。この数字は、およそ今の親たちの子ども時代の記憶とかけ離れたものではなからうか。

図の下部に並ぶ項目は、比較的体験の多いものではあるが、それでも「自分のツメを切ったこと」があまりない子どもは男子で9%女子で5%もいるし、「自分で自分の髪の毛を洗ったこと」のあまりない子どもも11%と9%という数字である。これは決して少ない数字ではないように思う。小学校の高学年になっても親から髪を洗ってもらいツメを切ってもらって暮らしている子どもが、1割もいる。何やら気持ちの悪い話である。また「生タマゴを手で割ったこと」があまりない子どもも同じく33%と25%で、にわかには信じ難いほどの数字も出てきている。

また図の下部を見ると、「カンヅメを開ける」「インスタントラーメンを作る」「ガスの火をつける」など、いわゆる文明の利器を利用する簡単で手のかからない行為の領域では、比較的体験の多いことも見い出される。これらの結果についての分析や解釈は、後ですることにして、次に進んでみよう。



図1・生活の体験

		(%)				
		ほとんどない	2、3回ある	わりとある	しょっちゅうある	
1人でごはんをたく	男子	65.0		19.4	8.2	7.4
	女子	40.2	25.4	18.4	16.0	
魚を焼く	男子	54.4		25.4	14.4	5.8
	女子	52.0	22.2	17.1	8.7	
店屋物の注文	男子	49.6		21.4	18.1	10.9
	女子	58.1		19.9	13.2	8.8
靴みがき	男子	55.9		24.0	13.5	6.6
	女子	44.8	27.3	19.7	8.2	
食器を洗う	男子	48.8		29.1	14.2	7.9
	女子	14.0	31.3	31.9	22.8	
手で洗たく	男子	44.3		34.8	16.2	4.7
	女子	14.8	32.3	35.2	17.7	
時計の針の調整	男子	23.3	24.3	31.8	20.6	
	女子	32.1	29.8	24.7	13.4	
肉の買物	男子	28.5	23.2	22.9	25.4	
	女子	20.4	20.0	30.6	29.0	
洗たく物を干す	男子	39.1		31.8	20.0	9.1
	女子	9.4	25.2	40.5	24.9	
家のふき掃除	男子	31.4		34.8	23.9	9.9
	女子	15.9	27.7	38.0	18.4	
果物の皮をむく	男子	27.5	30.1	25.3	17.1	
	女子	17.0	23.4	32.9	26.7	
雨戸を開める	男子	22.9	13.3	23.3	40.5	
	女子	21.9	16.2	21.1	40.8	
お茶を入れて飲む	男子	26.2		22.0	27.1	24.7
	女子	8.1	17.6	31.8	42.5	
おもてに水をまく	男子	21.1		29.2	32.6	17.1
	女子	10.9	28.2	37.6	23.3	
おもちを網で焼く	男子	34.7		22.6	26.2	16.5
	女子	32.2	21.7	29.7	16.4	
ガスコンロの点火	男子	13.6	15.2	27.7	43.5	
	女子	10.3	12.8	28.7	48.2	
インスタントラーメンを作る	男子	10.1	13.9	33.0	43.0	
	女子	12.4	21.5	38.9	27.2	
かん切りの使用	男子	9.8	12.8	29.8	47.6	
	女子	13.1	15.3	30.2	41.4	
生タマゴを手で割る	男子	14.1	18.6	27.7	39.6	
	女子	10.5	14.7	27.5	47.3	
カナヅチでクギを打つ	男子	5.0	13.0	46.1	35.9	
	女子	15.8	35.3	38.8	10.1	
自分で洗髪	男子	5.3	5.3	12.9	76.5	
	女子	4.0	5.1	10.6	80.3	
自分でツメを切る	男子	3.7	5.3	16.7	74.3	
	女子	4.2	12.3	82.4		

1.1

2. 自然の体験



少ない自然体験

次に図2は、「魚をすくう」、「カエルにさわる」などのいわゆる自然体験のほか、「強い風の中を歩く（傘がオチョコになる）」、「高い危険なところ（例えば身近な機会として屋根の上）に登る」、「自然に近い排泄の仕方をする（汲み取りトイレに入る）」など、人間のあまり人工化されていない生活環境下での生活体験をとり出してみたものである。

ここでもさきの自然体験と同じく、昔の子どもだったら当然持っていたであろう体験の大きな欠落が見られる。例えば、生まれて1度も「たき火」をしたことがない（1人でも誰かとも）子どもが男子34%、女子43%。「雨

で全身がビしょぬれになったこと」が1度もない子どもが12%と23%。生まれて1度も「犬や猫に直接さわったこと」のない子どもが、8%と7%。

こうした体験の個々の欠落自体はそれほど大きな意味を持たないかもしれない。しかしこの数字の背後から浮かび上がってくる、今日の子どもの偏った生活環境。心身の発達途上にあって、自然との触れ合いの中で健やかに育まれていかなければならないはずの子どもたちが、人工的に作られた、いわば温室の中で、もやしのようにたよりにげに成長している様子が、見てとれるように思われる。

図2・自然の体験

(%)

		ほとんどない	2、3回ある	わりとある	しょっちゅうある
屋根の上を歩く	男子	32.1	22.8	21.3	23.8
	女子	49.7		24.0	15.5
網での魚とり	男子	24.9	24.2	31.9	19.0
	女子	52.8		29.5	14.0
傘が、強い風でオチヨコになる	男子	33.0	38.2	18.7	10.1
	女子	45.2	37.0	13.9	
たき火をする	男子	33.7	33.2	22.8	10.3
	女子	42.6	32.2	19.1	6.1
カエルにさわる	男子	12.6	16.6	36.3	34.5
	女子	52.1		23.5	16.4
学校以外での植物栽培	男子	24.0	32.2	31.2	12.6
	女子	18.4	28.3	35.3	18.0
雨でビシヨぬれになる	男子	11.5	30.5	37.7	20.3
	女子	23.0	45.0	23.5	8.5
草むしり	男子	15.	29.3	35.0	20.5
	女子	9.0	21.1	46.9	23.0
汲み取り式トイレの使用	男子	11.4	24.2	30.3	34.1
	女子	8.5	20.0	38.3	33.2
犬や猫をだく、さわる	男子	7.8	13.0	39.6	39.6
	女子	6.7	13.1	40.6	39.6

もし何かの理由で子どもが今後、きわめてシビアな生活条件の下に置かれたら、どうなるのか。いわば野性を失ってしまったおとなしい動物、作られた小屋の中で、人工飼料を与えられなければ暮らせなくなってしまう「家畜」の姿を連想させられるようにも思う。子どもはもともとワイルドで、大きな適応力と、たくま

しい生命力を持っている存在だったはずなのである。そしてその力を一層大きなものへと育て上げて、おとなになって社会に出ていく日に備えるのではなかったのか。それを考えると、体験を失って、われわれおとなより、はるかに適応力の幅の狭くなってしまった子どもたちの将来が、おそろしくも思えてくる。

おとなっぽい体験の増加

こうした自然体験の喪失と裏腹に、子どもたちは、近代文明の所産とも言える、おとなっぽい体験を豊富にとり入れている。図3に示したように「飛行機に乗る」、「ヘアードライヤーの使用」、「タクシーに乗る」など、もともとおとなのために作り出された「便利な」機器を利用することには、30年前の子どもたちと比べものにならないほどの豊かな体験を持っている。

図が示すように、「タクシーに乗ったこと」が「わりと・しょっちゅう」ある子どもは8割、というのは都会生活ではわかるが、カメラのシャッターを何度も押したことのある子どもも6～7割。モノグラフ小学生ナウvol.1-10

『子どもの持ち物』によれば、自分用のカメラを持っている子どもは2割強だから、あとは親やきょうだいのカメラを借りてシャッターを切っているのだろう。いずれにせよ、小学校高学年でカメラをけっこう操作している子どもたちの姿がある。また「ヘアードライヤーの使用」は男子で4割、女子で6割弱。電卓での計算は共に4割強と、なかなかの数字である。図の中で、いちばん体験の少ないのは、「飛行機に乗る」ことだが、これとでも、1度以上乗ったことのある子どもは3割に達している。珍しいもの、便利なものとの接触の体験は、豊富に持っている様子がわかる。

図3・文化体験

		(%)			
		ほとんどない	2、3回ある	わりとある	しょっちゅうある
飛行機に乗る	男子	69.6	17.6	8.4	4.4
	女子	69.2	18.8	9.1	2.9
電卓で計算する	男子	26.9	28.0	27.3	17.8
	女子	26.9	29.7	29.7	13.7
ヘアードライヤーの使用	男子	30.3	29.7	24.0	16.0
	女子	13.0	24.3	30.7	32.0
誕生会に招待したりされたりする	男子	15.7	25.3	39.1	19.9
	女子	5.8	20.6	44.4	29.2
バースデーケーキのろうそくの火をふき消す	男子	11.9	24.1	40.6	23.4
	女子	8.7	21.6	44.9	24.8
写真撮影	男子	7.9	19.3	34.2	38.6
	女子	10.2	26.1	39.4	24.3
タクシーに乗る	男子	3.7	15.7	47.3	33.3
	女子	3.3	15.3	55.0	26.4

3. 情緒的な体験



この辺で、少し角度を変えて、「情緒的な体験」に接近してみよう。

われわれは生まれてから今日まで、さまざまな場で「強い情緒をひき起こすような体験」を積んできている。すなわち激しい恐怖や不安、苦痛や悲哀などのネガティブなものから、喜びや感動などポジティブなものまで、その内容は種々である。こうした情緒的な体験は、人生という料理において、ある種の調味料のような役割を果たしているのかもしれない。

しかもこうした情緒的体験を、特に子どもが幼い頃に、ある妥当な割合で体験することが、子どもの情緒性を育て、その人格に奥行きと幅を生み出すのではなからうか。「涙と

共にパンを食べたことのある者でなければ、人生の味はわからない」という西洋の諺は、成人してからのものかもしれないが、子ども時代にこそ恐怖の体験は、逆にそれがとり去られた時の安心感がどんなものかを教えることになるし、激しい悲哀の感情は、逆に喜びや平穏の意味を知らせることになる。しかも人格形成のまっただ中にある子ども時代に、ある程度の経験が必要ではなからうか。確かにわれわれが、子ども時代をふり返ると、次々と数多くの情緒的体験が浮かび上がってくる。その中でも特に、ポジティブな体験より、ネガティブな体験の方が、より強く色鮮やかに浮かんでくるのも意味があるのだろう。

ショック体験の不足

さてこうした観点から、図4「ショック体験」の内容を見てみよう。ここにはネガティブな情緒をひき起こすような体験のみを選んで構成してある。ポジティブな体験は、むしろ昔より現代の方が多いと推定されるので、

昔の子どもであったら、当然体験したと思われるような、ネガティブな体験だけを集めてみた。

まず体験の少ない方から見ていくと、これまでの体験領域より、さらに大きな体験の不足

図4・ショック体験

		(%)				
		ほとんどない	2,3回ある	わりとある	しょっちゅうある	
海やプールや川でおぼれそうになる	男子	65.0	26.7	1	4.7	-3.6
	女子	71.8	23.6			-0.8 -3.8
ガラスの破損	男子	49.9	38.3	8.1		-3.7
	女子	83.1	14.8			-0.3 -1.8
泣くほどの歯痛	男子	60.8	30.9	5.7		-2.6
	女子	62.1	30.1	5.7		-2.1
「まいご」になる	男子	58.3	30.7	8.0		-3.0
	女子	62.4	31.3			-1.4 -4.9
犬にほえられたこと	男子	51.5	27.9	12.9	7.7	
	女子	45.8	37.0	12.6		-4.6
魚の骨をのどへさす	男子	40.3	36.6	16.9	6.2	
	女子	45.5	35.7	16.2		-2.6
ひどく熱が出て、氷で冷してもらう	男子	31.9	44.1	18.4	5.6	
	女子	32.7	41.6	21.7		-4.0
お金を落とす	男子	22.9	47.4	20.1	9.6	
	女子	36.4	47.8	11.7		-4.1
1人での夜歩き	男子	14.4	21.5	31.9	32.2	
	女子	36.1	23.8	25.5	14.6	

が感じられる。例えば、「おぼれそうになったこと」のほとんどない子どもが、男子65%、女子72%。昔の子どもたちは、よく海や川でこうした危険な体験を積んだものだとも言われる。

次に「窓ガラスを割ってしまったこと」のほとんどない子どもが男子50%と女子83%。かつて男子たちは、戸外でボール遊びをしては、近所の家のガラスを割り、一目散に逃げたとか、どなられて親に言いつけられたとか、そうした体験にはこと欠かないはずのものであった。

次は歯の痛み。虫歯の痛みは経験したものでなければわからないだろう。しかしこうした点でのケアが進んだ現在、その痛みを知らない子どもは男子で61%、女子で62%もいる。また「まいごの経験」のない子どもが58%と62

%。「犬にほえられてこわい思いをしたこと」のない子どもが52%と46%。「魚の骨をのどへさして大泣きしたこと」も、昔の子どもは1度や2度ではなかったと思われるが、その体験が1度もない子どもが40%と46%。

どう見ても最近の子どもたちがこうした体験を大きく欠いているという以外に、言いよのない数字が並んでいる。つまり、厳しくつらく悲しい目にほとんど出会ったことのない子どもたちの姿である。これでは自我が、シビアな条件の下で耐性を欠き、こわれ易いもろい構造のものになっていっても、当然だろう。今日よく指摘されるような感情の起伏が少なく、無感動でのっぺりした若者像の形成は、ここに始まるのかもしれない。

とっくみあいのケンカもせず

さて図5は、人とのケンカの体験である。ケンカは相手との対立であると同時に、それはまた相手との真剣なかかわり合いであり、そこには浅からぬ人間関係があることを意味している。子どものきょうだいケンカがどの家でも絶えないのは、このことを意味してい

るのだろう。さて、子どもたちのケンカ体験はどうなっているのだろう。まず「友人とのとっくみあいのケンカ」をしたことが、「わりと・しょっちゅうある」と答えた子どもはごくわずかで、男子で32%、女子で9%。逆に「ほとんどない」子どもが31%と67%。昔と比べ

図5・攻撃体験

		(%)			
		ほとんどない	2、3回ある	わりとある	しょっちゅうある
友だちととっくみあいのケンカ	男子	30.7	37.5	24.8	7.0
	女子	66.7	23.9	7.9	1.5
ケンカして、人をたたく	男子	10.2	28.9	34.2	26.7
	女子	20.4	29.0	29.4	21.2
きょうだいで大ケンカをする	男子	13.9	10.8	19.1	56.2
	女子	13.8	10.8	24.9	50.5

て最近の子どもたちがケンカをしなくなってきている様子が表れた数字である。次にとっくみあいほどではないが、「人をたたいた」ことは、大きく増えて61%と51%。しかしこの数字も、昔の子どもたちから比べたら、隔世の感のある数字なのではなかろうか。

このように、ケンカ体験が少なくなっていることは、別に子どもたちが、よくしつけられ、社会性を増してきていることにはならないだろう。友人との接触の機会が減り、また激しく対立するような相手との深いかか

わりを避けるようになってきていることの表れなのかもしれない。その証拠に、きょうだいゲンカの方は、けっこう激しくやっている様子なのである。「わりと・しょっちゅう」やっている子どもは男子女子共に75%（1人っ子を除く）。性差のないのもおもしろい。とすると、きょうだいゲンカ以外の仲間とのケンカが減ってきているのは、現代の子どもたちの成長過程に起こっている人間関係上の問題点を示す、1つの赤信号なのかもしれない。

生と死にも出会わず

情緒的な体験のしめくくりとして、子どもたちが、人の生や死をどのくらい見ながら暮

らしているのか、その体験を見てみよう。

図6の上の3項目がそれである。家族の入

図6・生死の体験

		(%)		
		ぜんぜんない	1度くらいある	何度もある
家族が病気で入院	男子	46.5	41.7	11.8
	女子	43.6	47.3	9.1
生まれたばかりの赤ちゃんを見る	男子	41.8	38.4	19.8
	女子	33.4	45.5	21.1
犬や小鳥の死に出会う	男子	31.1	42.5	26.4
	女子	27.8	41.0	31.2
老人との同居	男子	33.0	35.4	31.6
	女子	37.0	30.6	32.4
赤ちゃんのおむつをかえたり、寝かしたりする	男子	75.4	16.0	6.3
	女子	55.4	25.9	12.7
赤ちゃんを、おんぶする	男子	32.0	27.7	26.9
	女子	22.1	29.1	31.5

院という不安な体験をしたことの全くない子どもが4割強。生まれたての赤ん坊を見たことがない子どもが4割弱。犬や小鳥の死にも出会ったことのない子どもが3割弱。また「体験した」と言ってもそのほとんどは1回ぐらいでしかないのだから、子どもたちが、テレビなどで間接的な出会いは持っていても、現実の生や死とは遠く離れて暮らしている様子がよくわかる。

また老人や赤ん坊との接触については、老

人との同居は、6割強が経験しているが、赤ん坊を身近に見、とり扱ったりした経験は5割以下。特に寝かす、おむつをとりかえるなどの「世話」を、回数を重ねて経験している子どもは男子で1割弱、女子で2割弱でしかない。家族サイズが減少し、家族の構成が単純になったと言われるが、確かに子どもたちは、人の一生につき合う、といった体験を欠いて成長している様子がわかる。

